

「シンポジウム・ユーラシアを研究する『言語教育におけるレアリア～ロシア語と日本語』」の開催について

堤 正 典

2014年度神奈川大学国際交流事業として採択された「シンポジウム・ユーラシアを研究する『言語教育におけるレアリア～ロシア語と日本語』」が言語研究センターの主催により7月12日（土）に本学横浜キャンパスで開催された。これは、2012年3月の「シンポジウム・ユーラシアを研究する『日露の交流と言語教育～ロシア語の新たな国際性』」（言語研究センターと当時活動していたプロジェクト研究所「ユーラシア研究センター」の共催）の続編にあたるもので、ロシア語教育・日本語教育におけるレアリアをテーマとした。

レアリアは言語を使用するにあたって必要となる言語文化に関する知識であり、それを欠くと円滑なコミュニケーションに支障を来すものである。

ロシアから本学協定校の国立アストラハン大学日本語講師（当時）の小林潔氏、同大学准教授アリーナ・サヴィノワ氏、ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員アレキサンダー・コスチルキン氏の3名をお招きした。小林氏はロシア人に対する日本語教育と日本人に対するロシア語教育の経験をもち、あとのお二人はロシア人の日本語教師である。また、3名とも優れた言語研究者である。

日本側は、筆者の他に、コメンテーターとして、本学で日本語教育を担当する高木南欧子特任准教授、ロシア語教育からは慶応大学専任講師の朝妻恵里子氏と東京外国語大学非常勤講師の阿出川修嘉氏が登壇した。

神奈川大学の石積勝学長による開会挨拶のあと、4件の報告があり、筆者による「外国語教育とレアリア」、小林氏による「日露の異言語教育現場から見るレアリア」、サヴィノワ氏による「文化コンセプトとレアリア-外国語教育における言語文化の役割-」、コスチルキン氏による「日本語基礎動詞の本来的使用-ロシア出版の教科書の観察から-」と続いた。その後コメンテーターからの意見、全体討論と、白熱した議論が行われた。

レアリアについては、必要性は明らかであるが、どのように教育するか（あるいは教育すべきか、実体験ではなく教育が行えるか、など）はノウハウがあまりなく、各教員に任せられている部分が多い。今回は、問題の所在の確認と具体的な要検討事項の提出が行われたと言ってよいだろう。

予想外の参加者があり、企画者として大変うれしく思い、今後もこのテーマの議論を続けていきたいと考える。

（外国語学部教授・言語研究センター所長）